

カフカの『あるアカデミーへの報告』からよむ人間像 —ロートペーターのミミクリの破綻と権力の複製性

An analysis of Kafka's *Ein Bericht für eine Akademie*
- Homogeneity and mimicry

山尾 涼[†]
Ryo YAMAO

Abstract The short story *Ein Bericht für eine Akademie* was written by Franz Kafka in 1917. It was written in the first person, and the protagonist is an ape who came to behave and to think like a human being. When the ape who was named “Rotpeter” was caught by a hunting team in Africa, he was just a wild ape, but the ape decided to mimic human beings by his experience in the transport ship. At last he succeeded in civilized society as a “performer”, and attained some social status. By describing “Rotpeter” who became almost a human being from an ape by mimicry, Kafka succeeded in defining the superficialness of the existence (Dasein) of human beings. This is a story of Kafka's criticism of the civilization. According to Jean Baudrillard's *The Transparency of Evil*, a form of modern evil is based on an increasingly homogenized tendency of society. Has *Ein Bericht für eine Akademie* a similar critical aspect as *The Transparency of Evil*? On the basis of Baudrillard's theory of homogeneity, I interpreted the significance of Rotpeter's mimicry.

1. はじめに

1887年に発表した『道徳の系譜』(*Zur Genealogie der Moral*)の中でニーチェは、本来動物であった人間が良心と道徳心を備えた、いわゆる近代以降の文明化された「人間」へと至るまでの過程を以下のように語っている。

外に敵や障害がなくなったため、慣習の規則正しさと圧迫してくる狭苦しさの中に押しこめられた人間は、耐えきれなさに自分自身を引き裂き、追い詰め、かじり、心の平静を乱し、そして自らを虐待した。自分の檻の格子に身をぶつけて傷を負うこの動物(それを人間は「調教する」ことを望んでいる)。[...]一この愚か者、憧れつつ、絶望に陥ったこの囚人が、「良心の疾しさ」の発案者となった。しかしそれとともに、今日に至るまで人間がまだ快癒していない、最も法外で、最も恐ろしい病気が持ち込まれた。

すなわち、人間が人間であることに、つまり自分自身に苦しんでいるのである。これは、動物的な過去から暴力的に分断されて、いわば新しい状態と生存条件に一足飛びに飛び込んだことの結果であり、これまで人間の力と、意欲と、脅威が依拠していた昔の諸本能に対して宣戦布告をした結果であった。¹

「人間獣」Gethier „Mensch“であった「人間」が魂を獲得し、社会的な「善い」と「悪い」の分別にしたがって道徳と価値判断の指標を定めた結果、その指標と本性との狭間で永遠に苦しまざるをえない運命へと陥った。ニーチェの描く人間のもがく姿は、『道徳の系譜』の30年後に執筆された、カフカの短編小説『あるアカデミーへの報告』(*Ein Bericht für eine Akademie*)に主役として登場する、ロートペーターという奇妙な一匹の猿を想起させる。黄金海岸で狩猟隊に捕獲されて、狭い檻へと閉じ込められ、「出口なし」という状況へと陥った結果、「人間」として生きていくことを決心する猿の物語である。

かつて拙論において指摘したように²、『あるアカデミ

[†]愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

一への報告』とは、カフカによる文化・文明批判の物語であるといえる。ニーチェやフロアバール以降、カフカ、フロイトへと続く文化的ペシミズムの系譜は、啓蒙思想を基盤とした 19 世紀後半当時の道徳規範や、キリスト教精神に基づいて自然的本能を矯正しようとする観念が、人間の本性にとっていかに抑圧的に作用したか、その影響の計り知れなさを表現している。『あるアカデミーへの報告』では、猿本来の「野生」の生に対して、それを抑圧し、抹消しようとする、いわば暴力的に機能する「文明」との対置が描かれる。

人間性を擁護することよりも、商業や産業の発展に重きを置いた社会そのものが、主人公本来の存在の在り方と対立し、主人公を疎外するという構図は、『あるアカデミーへの報告』の 5 年前に執筆された長編小説『失踪者』(Der Verschollene)でも共通するテーマとして扱われている。しかし本作品では、一匹の猿を主人公に設定することにより、『失踪者』よりもテーマの先鋭化が図られている。その意味についてエムリッヒは、以下のように指摘している。

カフカの動物たちは、人間における自己矛盾の表現である。動物たちは極端な限界踏み越え、そこでは、人間に固有な生活形式と、省察の地平が放棄されて、人間の存在全体がみえてくるような限界踏み越えを表しているのである。Die Tiere Kafkas sind der Ausdruck des Selbstwiderspruchs im Menschen. Sie stellen extreme Grenzüberschreitungen dar, in denen die immanenten Lebensformen und Reflexionsebenen verlassen sind und das Ganze menschlicher Existenz ansichtig wird.³

カフカは動物から人間へと一気に存在を跳躍させたロートペーターを描き出すことで、文明が人間を作り上げるシステムを描くことに成功した。つまり『あるアカデミーへの報告』における「文明」に囚われた猿とは、冒頭に引用したニーチェが言い表したような、慣習という檻へと閉じ込められた、もしくは自らを閉じ込めた現代的人間のアレゴリーとして読むこともできる。そのように読むことにより、文明社会での人間の存在の置かれている状況が、より鮮やかに浮かび上がってくる。

文明とは、災害や無秩序から人間を守り、その生活を安全かつ豊かなものへと発展させるという善の側面を備えている一方で、時として、人間の幸福原則と完全には相いれず、社会的制約を課すという面も備えている。『文化における不満』(Das Unbehagen in der Kultur)の中でフロイトは、文明及び文化がその日々の生活の中で、絶え

間なく人間に制約と断念を課してくることが、現在における文明批判の感情に結びついていると述べる。⁴また、ボードリヤールは文明社会の“悪”の側面について、『透き通った悪』(Transparenz des Bösen. Ein Essay über extreme Phänomene)の中で以下のように指摘した。

悪は、いたるところに存在する。悪の現代的形態の

アナモルフオーズ

歪んだ像には限りがない。予防衛生、自然の準拠枠

の廃絶、暴力の隠蔽、暴力の萌芽とあらゆる呪われた部分の根絶、否定的なものの美容整形手術などが徹底しすぎて、計算された管理体制や善の言説とし

かかかわろうとしない社会、悪について語る可能性がもはや存在しない社会において、悪は、ウイルス

メタモルフオーズ

的でテロリスト的なあらゆる形態に 変 身 して、

われわれにつきまとう。Überall begegnet man einer endlosen Verzerrung der gegenwärtigen Formen des Bösen. In einer Gesellschaft, die aufgrund ihrer Prophylaxe und der Abtötung ihrer natürlichen Referenzen, des Weißwaschens der Gewalt und der Ausrottung aller Keime und aller verfernten Teile und der Schönheitsoperation des Negativen nurmehr mit berechnender Verwaltung und dem Diskurs des Guten zu tun haben will, in einer Gesellschaft, wo es keine Möglichkeit mehr gibt, das Böse auszusprechen, hat es sich in all die uns heimsuchenden viralen und terroristischen Formen verwandelt.⁵

ここでは全体の均質化、他者への排斥といった現代的悪の性質が、社会集団の中でウイルス感染的に隣り合う諸項を取り込みながら、蔓延し、増殖していくことが問題となっている。ボードリヤールの挙げる「予防衛生、自然の準拠枠の廃絶、暴力の隠蔽、暴力の萌芽とあらゆる呪われた部分の根絶、否定的なものの美容整形手術」といった悪の傾向とは、西欧的な社会がかつて目指した、理性によって通分しきれないもの、異質なものを排斥しようとする傾向の極端な表れであるといえる。その傾向は時代を重ねるごとに過剰なものとなっていきののだが、「否定的なもの」を排除しようとする志向とは、文明の本質的な要素のひとつである。

カフカが『あるアカデミーへの報告』の中で描いたのも、このような文明において増殖していく、人間性の均質化と疎外という悪の側面である。人間を介して、ボードリヤールの言葉を借りれば、ウイルス感染的に増殖する文明の悪の側面に遭遇した主人公は、どのように近代

以降の現代的「人間」へ、そして文明へと取り込まれていくのだろうか。

2. ロートペーターの誕生

『あるアカデミーへの報告』は、「アカデミーの偉大なる先生方！」Hohe Herren von der Akademie!(299)という言葉から始まる。これは主人公である猿、ロートペーターの言葉であり、彼が「自分が猿だった頃の前歴」mein äffisches Vorleben(ebd.)について学会報告を行うという設定のもと、報告調の一人称形式で物語は進行する。ロートペーターが人間に捕獲されたのは、5年前のことである。物語内の現在では「文明化された世界のあらゆる大きなヴァリエテ」auf allen großen Varietébühnen der zivilisierten Welt(301)においてゆるぎない地位を確立した彼も、捕獲される以前は、アフリカの黄金海岸に棲む野生の一匹の猿に過ぎなかった。その猿であった彼が仲間たちと共に水飲み場へと群れで向かう途中、狩猟隊に狙撃されたのが、文明との最初の遭遇である。

わたしは2発の銃弾を受けました。1発は頬へ。それはかすり傷でした。ですが、毛の生えなくなった大きな赤い傷跡がひとつ残りました。その傷のせいでわたしは、不愉快な、まったく合わない、文字通り猿が発案したような、ロートペーターという名前を授けられました。まるで、最近くたばった、ちょっとは名の知られた調教猿のペーターとわたしとの違いが、この頬の赤い傷だけであるかのようです。ich bekam zwei Schüsse. Einen in die Wange; der war leicht; hinterließ aber eine große ausrasierte rote Narbe, die mir den widerlichen, ganz und gar unzufriedenen, förmlich von einem Affen erfundenen Namen Rotpeter eingetragen hat, so als unterschiede ich mich von dem unlängst krepiereten, hie und da bekannten, dressierten Affentier Peter nur durch den roten Fleck auf der Wange. (301)

主人公の猿と文明との出会いは、実弾で狙撃されることから始まる。「銃」とは、文明の血なまぐささや野蛮さを端的に象徴する武器である。植民地時代に蔓延した、力づくによる征服と同化の強制がおのずと想起させられる。その一方でロートペーターの語る「アフリカ」という土地は、血なまぐささや野蛮さを連想させる場としては描かれていない。むしろ「黄金海岸」という言葉の響きが象徴しているように、「アフリカ」での野生時代は、ユートピア的なイメージを内包しつつ文明社会に対置さ

れている。

こうして「ロートペーター」が誕生するのだが、これは以前有名だった猿の「ペーター」という名前に、赤面、赤痣を指す rot という語を足しただけの名前である。死んだペーターも芸を売りものにしていただろうだが、同様にロートペーターも、後に舞台に立つための訓練を受けることとなる。焼き直しのような名前、同じ社会的役割を割り振る行為、死んだ個体から新しい個体へと繰り返される訓練は、ロートペーターを以前の猿ペーターの代用として扱うことを意味している。「名付ける」という行為は、猿を「商品」として資本主義的な社会の構造に組み込むことを表す。ここでは猿という生命は、使い捨ての利くもの、死んだらまた新しい個体を捕まえてくることによって取り換え可能なものとして扱われている。

銃撃で受けた傷により気絶していたロートペーターが次に目を覚ました時には、彼はヨーロッパ行きの船の中で狭い檻に閉じ込められていた。その檻の前を、多くの船員が行き来する。「どんよりとした目つき」trüber Blick(308)、とロートペーターが評する彼らは画一的で、互いに似通っている。「わたしはこれらの人間があちこち歩き回るのを見ました。いつも同じ顔、同じ動きです。しばしば、それはたった一人の人間であるかのようにわたしには思えたのです。そんなふうにしてこの人間、もしくは人間たちは、何にも邪魔されずに歩いているのでした。」Ich sah diese Menschen auf und ab gehen, immer die gleichen Gesichter, die gleichen Bewegungen, oft schien mir, als wäre es nur einer. Dieser Mensch oder diese Menschen gingen also unbehelligt. (307)

「いつも同じ顔」、「同じ動き」をして、「たった一人の人間」のようにロートペーターの目に映る船員たちは、多様な外見と個性を失っている。彼らを観察した結果、ロートペーターの心に「ある高い目標」ein hohes Ziel(ebd.)がおぼろげながら浮かび始める。「もし自分が彼らと同じようになれば、格子を開けてやる、と誰もわたしに約束しなかった」Niemand versprach mir, daß, wenn ich so wie sie werden würde, das Gitter aufgezogen werde. (ebd.)にもかかわらず、ロートペーターは、「彼らと同じようになる」＝「どんよりとした目つき」の人間と同化することを決断する。テキスト内でロートペーターは船員について、自分を強く惹きつけるようなものは何もなかったと語る。だが、捕獲された猿として生きるか、もしくは死ぬかを選ぶよりもロートペーターは、他者と判別不可能なほど独自性を失った船員たちを手本として、自らを加工し始める。

ここで、ロートペーターの先代の調教猿ペーターとロートペーターの代替可能性を振り返ると、ロートペータ

一の目を通して描かれる互いに似通った船員たちにも、つきつめれば相互に代替可能な要員であるという共通点を挙げるができる。代替可能であるという点において、両者には、檻に閉じ込められた猿か、もしくは労働という見えない檻の中ではあるが「何にも邪魔されずに」動き回ることでできる人間か、という違いしかない。このような意味において、人間になるという「出口」はロートペーターを強く惹きつけなかったといえる。

人間が魅力的でないにもかかわらず、「自由」*Freiheit*(308)を選ぶより、人間たちのどんよりとした目つきの中に表れている「出口」*Ausweg*(*ebd.*)を選んだと語るロートペーターが、以上のように存在の代替可能性について認識していたことを直接裏付ける記述はない。この、選択の理由を説明していないことについては、意図的に言語化を避けた結果とも考えられるが、むしろ、理由を言語化することがそもそも不可能だったとも考えられる。つまり、この言語化の不可能性は、当時のロートペーターが、言葉を基盤とする思考を行っていなかったことを表しており、本文中に「猿は腹で物を考える」*Affen denken mit dem Bauch.* (304)とあるように、本能的な直観に従った行動であることをほのめかす。テキストの全体を通じてロートペーターが動物であった頃の情動や自らの思考について、現在彼が習得した人間の言語によって説明づけることができないでいることや、抽象的であいまいな表現が繰り返し出てくることは、動物状態への言語による遡及の不可能性が表現されているのである。ロートペーターの記憶が人間の身振りを学び始めるあたりから次第に鮮明になってくることは、言語の習得に伴って時間的な区分の感覚が形成されて、それにより言語化可能な過去の記憶が生まれたことを表す。

しかし、そのように論理的な思考の筋道に従って選択したわけでもなくとも、いずれにしてもロートペーターは、捕獲された猿や、身を粉にして労働する人間は等しく、資本主義社会において本来の独自の質的価値を失い、量的にしか扱われない労働力として管理される運命にあることを直観した。その直観を得たことにより、ロートペーターにとって「自由」はもはや至ることのできないほど、遠いものとなる。代用のための均質化という文明の弊害については『啓蒙の弁証法』が端的に、以下のような文章をもって言い表している。

存在は、加工と管理という相の下で眺められる。一切は反復と代替の可能なプロセスに、体系の概念的モデルのためのたんなる事例になる。動物はいうまでもなく、個々の人間もまたその例外ではない。Das Sein wird unter dem Aspekt der Verarbeitung und

Verwaltung angeschaut. Alles wird zum wiederholbaren, ersetzbaren Prozeß, zum bloßen Beispiel für die begrifflichen Modelle des Systems, auch der einzelne Mensch, vom Tier zu schweigen.⁶

「自由」な猿に戻るための「出口」を喪失し、人間になるという「まやかし」*eine Täuschung*(305)の出口を選択するロートペーターと、「同じ顔」をした船員は 20 世紀の社会批判の書を取先取りするようなカフカの視点を表している。さらには「人間」の形成される過程が、言語習得の過程と、物と動作のシニフィアンとシニフィエとの関連と重ねられつつ、文学表現へもたらされている。

3. ミミクリの破綻

『あるアカデミーへの報告』の中で、ロートペーターは「出口」*Ausweg* という言葉を多用し、捕まった際に陥った自らの状況を「出口なし」*kein Ausweg* と表現する。

わたしは出口を持っていないのでした。しかしその出口を手に入れなければならなかった。なぜなら、出口なしには生きられないからです。ずっとこの箱の壁にくっついていて一死んでしまうことは避けられないかもしれない。しかし、ハーゲンバックでは猿は箱の壁に押し込められているのが当たり前なのです。—こうなった以上、こうしてわたしは猿であることを止めてしまいました。Ich hatte keinen Ausweg, mußte mir ihn aber verschaffen, denn ohne ihn konnte ich nicht leben. Immer an dieser Kistenwand — ich wäre unweigerlich verreckt. Aber Affen gehören bei Hagenbeck an die Kistenwand — nun, so hörte ich auf, Affe zu sein. (304)

ペーターの代用になるように迫られたロートペーターは、この猿の代わりになるより猿であることをやめて、人間の真似をしながら生きることを選ぶ。その結果ロートペーターは、「わたし、この自由なる猿」*ich, freier Affe*(299)と自称していたかつての自身のアイデンティティの根幹をなすもの、つまり「猿の本性」*Affennatur*(310)、「わたしの根源」*mein Ursprung*(299)、「青春時代の記憶」*Erinnerungen der Jugend*(*ebd.*)、「わたしの過去」*meine Vergangenheit*(300)といったすべてを手放さざるをえなくなる。*Affennatur* のような文明の維持に反発する自然的要素は、社会の中へ生成りそのまま持ち込むことは許されない。危険性のある自然動物を、何も手を施さずに街中に放すことが許されないことが道理であることを思えば自

明のことだが、このことは、まさに先の引用でアドルノとホルクハイマーが語ったように、資本主義的文明社会においては、動物も含めたあらゆる存在が、資本を生み出すための一分子としてしか所属できないことの表れである。つまり、ロートペーターが独自のアイデンティティを手放さなければ人間化すること、すなわち人間と同じく社会の一員となることが叶わなかったこととは、文明が存在の本来のあり様に対して抑圧し、強制するという権力的作用を及ぼすとカフカが捉えていたことを示す。

人間の言語を自在に操るまでになったロートペーターは、「全体としてわたしは、いずれにしても到達したいと望んだものには到達しました」*Im Ganzen habe ich jedenfalls erreicht, was ich erreichen wollte.* (313)と語るほど、社会的な地位と名声を獲得する。実際にはこの成功はロートペーター自身の固有なものの喪失によって成立したもののだが、それははたして等価交換といえるものだったのだろうか。ロートペーターの言葉の端々には、人間への憧れをもたずに人間同様になったことについて、「出口」のなかったことを言い訳に挙げつつも、この成功にある程度満足している、というよりもむしろ、誇りに思っている様子がうかがえる。「ヨーロッパ人の平均的教養に達成した」*ich [habe] die Durchschnittsbildung eines Europäers erreicht.* (312)と謙遜をこめつつ公言し、自分の成功について、「ほとんど毎晩公演があり、おそらくこれ以上はないほどに成功するに至りました」*Am Abend ist fast immer Vorstellung, und ich habe wohl kaum mehr zu steigernde Erfolge.* (313)とロートペーターは語る。

以上の報告だけならば、ロートペーターの成功はゆるぎのないものに聞こえるかもしれない。しかし結末の直前、ロートペーターがウイトを交じえて、夜は雌のチンパンジーと共に過ごす、と唐突に語り始めた辺りから、その存在は途端にグロテスクさを増す。

深夜に、宴会や学術的な会合や、内輪の集まりから家に帰ると、調教途中の小さな雌チンパンジーがわたしを待っていてくれて、猿の方法でわたしは彼女と楽しい時間を過ごします。昼間の間は、わたしは彼女を見たくありません。というのも、彼女の眼差しには、調教されて、混乱した動物の狂気があるのです。それに気がつくのは、わたしただ一人であり、わたしはそれに耐えられないのです。*Komme ich spät nachts von Banketten, aus wissenschaftlichen Gesellschaften, aus gemütlichem Beisammensein nach Hause, erwartet mich eine kleine halbdressierte Schimpansin und ich lasse es mir nach Affenart bei ihr wohlgehen. Bei Tag will ich sie nicht sehen; sie hat*

nämlich den Irrsinn des verwirrten dressierten Tieres im Blick; das erkenne nur ich und ich kann es nicht ertragen. (313)

「学術的な会合」に出席した後、雌のチンパンジーと夜を過ごすという告白は、ロートペーターのミミクリという生存形式の破綻を表現する。ロートペーターは、「人間世界の方が心地よく、ぴったりはまり込んだように感じている」*wohler und eingeschlossener fühlte ich mich in der Menschenwelt*(299)という点では、もはや猿とはいえず、人前ではズボンを履くといった倫理的感觉を備えつつもパートナーは依然として猿である、という点では完全なる人間ともいえないのだが、ロートペーター自身がこの破綻に気づいているような描写はない。ロートペーターのミミクリという生存形式の倫理的な矛盾は、彼の成功に影を落とすとともに、これまでとはまた違った問題を提起する。それは『あるアカデミーへの報告』の根幹をなすテーマでもある、一匹の猿でも上辺を取り繕えば人間社会全体に受け入れられるということ、つまり、社会における内面性の喪失に対するイロニーである。ボードリヤールは、20世紀の作家ゴンブローヴィッチの文章を引きつつ、この問題について以下のように論じている。

人間であることは、演技者であることだ—人間であることとは、ひとりの人間を演じることだ—人間であることとは、深層でひとりの人間であることなしに、人間のように振舞うこと—人間であることとは、人間性を唱えることなのだ。*Mensch sein heißt, Schauspieler sein — Mensch sein heißt einen Menschen spielen — Menschsein ist 'sich benehmen' wie ein Mensch, ohne zutiefst einer zu sein — Mensch sein ist Menschlichkeit rezitieren.*⁷

ここに挙げられた行為が人間の条件となるならば、ロートペーターはまぎれもなく現代の人間像を模倣し、表現しているといえよう。つまり、「深層でひとりの人間であること」なしに「人間として振る舞い」、演技者として「人間性を唱える」のが人間の条件であるとするならば、である。そもそもロートペーターのパートナーが猿である、ということ自体は、彼が身体的には猿であることからすれば、もしかするとそれほどおかしいことではないのかもしれない。仮にそうであったとしても、いずれにせよ雌チンパンジーがロートペーターと同レベルにまで調教、もしくは学習が至っておらず、「混乱した動物の狂気」の中にいるという描写が読者の不安を煽る。

また、その「狂気」にロートペーターは耐えられない

と語っている。これまでの饒舌さとは打って変わって、この「耐えられなさ」の理由についてはこれ以上言及されることはない。これまでロートペーターがしばしば、他の動物に対して *dressieren*, *krepieren* といった一種の嘲りのこもった言葉を使用してきたことを鑑みれば、ここには、ロートペーターが自分自身を含めた「人間」をあらゆる存在の上位に据えて、下位のものとしての動物を見下して嫌悪する感情が存在しているといえるのではないかと察せられる。かつて、「どんよりとした目つき」をした人間たちを介して文明は、捕獲したばかりのロートペーターを檻に閉じ込め、煙草の火で毛皮を焼き、シュナプスを飲ませて遊ぶなど権力を行使し、その結果、ロートペーターにアイデンティティとの決別を実行させた。雌チンパンジーの調教途中の混乱した狂気に不快感を抱くロートペーターはいまや、かつて自らを抑圧した文明の側についているといえる。

こうして、文明は人間に対して均質化を迫るという点で権力的であり、人間はロートペーターに対してミミクリという生存形式を選ばせたという点で権力的であり、またロートペーターは別の動物に対して権力的に振る舞う、というように、『あるアカデミーへの報告』では複製化された権力が他項を取り込み、増殖する構造と過程が描かれている。

4. まとめ

ある面からすると、雌チンパンジーの狂気は、文明から人、人からロートペーターへとウイルス感染的に増殖する権力の影響を食い止めるための一種の防波堤となっている。狂気は文明や社会にとって、生産性へと還元されない部分、異質性を排斥して均質化しようとする流れに強固に抗う部分であるともいえるだろう。少なくともこの雌チンパンジーは、ロートペーターが手放してしまった野生の猿というあり方に留まるという「自由」を、狂気という形ではあるものの、依然として保持している。

猿の毛皮を纏ったまま、偽りの人間性というマスクを被ってミミクリを続けるロートペーターの姿は孤独である。カフカの短編『雑種』(*Eine Kreuzung*)で描かれた半分猫で半分羊の雑種の生き物のごとく、サルとヒトの生物学的分類の中間状態に位置し、パートナーであるはずの雌チンパンジーと完全に心を通わすことも、また姿かたちをそっくり人間に変えてしまい、人間の世界という「茂みの中に飛び込む(姿をくらます)」*sich in die Büsche schlagen* (312)こともできない。テキスト中で、ロートペーターはこの「茂みの中に飛び込む(姿をくらます)」という言い回しを使い、自分がそれに成功したと自負して

いるが、実際のところ、姿が猿のままである以上、完全に姿を消してしまうことは不可能なのである。ミミクリという生存形式の破綻にロートペーター自身が気づいていない、もしくは気づいていないというミミクリを重ねる、という描き方の上にこの報告は成り立っており、それによって、ロートペーターの孤独さはなおのこと際立つ。

冒頭で引用したニーチェの言葉に、「人間が人間であることに、つまり自分自身に苦しんでいる」との文言があった。均質化という文明的な悪の影響によって動物的な自らの過去に決別し、疎外されて、「人間であること」に苦しまざるを得なくなったロートペーターの演じる孤独な姿ほど、現代の人間らしい、現代の人間の像はないのかもしれない。また、もしかすると、雌チンパンジーの目に宿る調教されて混乱した「動物の狂気」は、あらゆる人間の目のうちにもそうした残滓を垣間見ることができのかもしれない。むろん、ロートペーターのうちにも、である。彼ら2匹の猿に、「人間」であることに苦しむ人間を重ねて読むとき、動物的な過去から分断されて、現代の文明化された人間へと至るまでの道筋が浮かび上がってくる。

引用文献

カフカのテキストからの引用は、() 内に頁数で示す。

Kafka, Franz: Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Wolf Kittler und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main (Fischer) 2002.

註

¹ 引用部分が長いので、本文中ではなくここへ原文テキストを記載する。Der Mensch, der sich, aus Mangel an äusseren Feinden und Widerständen, eingezwängt in eine drückende Enge und Regelmässigkeit der Sitte, ungeduldig selbst zerriss, verfolgte, annagte, aufstörte, misshandelte, dies an den Gitterstangen seines Käfigs sich wund stossende Thier, das man „zähmen“ will, [...]— dieser Narr, dieser sehnsüchtige und verzweifelte Gefangne wurde der Erfinder des „schlechten Gewissens“. Mit ihm aber war die grösste und unheimlichste Erkrankung eingeleitet, von welcher die Menschheit bis heute nicht genesen ist, das Leiden des Menschen am Menschen, an sich: als die Folge einer gewaltsamen Abtrennung von der thierischen Vergangenheit, eines Sprunges und Sturzes gleichsam in neue Lagen und Daseins-Bedingungen, einer Kriegserklärung gegen die alten Instinkte, auf denen bis dahin seine Kraft, Lust und Furchtbarkeit beruhte. Nietzsche, Friedrich: Zur Genealogie der Moral, in: Nietzsche, Werke. Kritische Gesamtausgabe in 40 Bänden

in 9 Abteilungen. Hrsg. von Giorgio Colli u. Mazzino Montinari. 1. Aufl. Berlin (Walter de Gruyter) 1968, 2. Band, S. 339.

² カフカが人間と動物の区別をどのように捉えていたかについて、『あるアカデミーへの報告』を取り上げて、以下の拙論で論じた。山尾涼：「フランツ・カフカの『あるアカデミーへの報告』について—文明的な生の周囲に〈檻〉が構築される過程—」、『ドイツ文学研究』第41号、2009年、17-30頁。

³ Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Frankfurt am Main (Athenäum) 1960, S. 140.

⁴ 「見過ごすことができないのは、文化の大部分が欲動の断念の上に作られており、様々な強大な欲動を満足させないことである。この「文化のための断念」は、人間の社会関係の多大な領域を支配している。「文化のための断念」は、あらゆる文化が戦わなくてはならない、敵意の原因である。」 [...] ist es unmöglich zu übersehen, in welchem Ausmaß die Kultur auf Triebverzicht aufgebaut ist, wie sehr sie gerade die Nichtbefriedigung [...] von mächtigen Trieben zur Voraussetzung hat. Diese »Kulturversagung« beherrscht das große Gebiet der sozialen Beziehungen der Menschen. [...] sie (=Kulturversagung) ist die Ursache der Feindlichkeit, gegen die alle Kulturen zu kämpfen haben. Freud, Sigmund: Das Unbehagen in der Kultur. Und andere kulturtheoretische Schriften. Hrsg. von Ilse Grubrich-Schmitis. Frankfurt am Main (Fischer) 2013, S. 63.

⁵ Baudrillard, Jean: Transparenz des Bösen. Ein Essay über extreme Phänomene. Berlin (Merve) 1992, S.95.

⁶ Adorno, Theodor W. und Horkheimer, Max: Dialektik der Aufklärung, in: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Hrsg. von Rolf Tiedemann. 1. Aufl. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1981, 3. Band, S. 91.

⁷ a. a. O., S. 196.

(受理 平成26年3月19日)